

ルシャナの仏国土 二

第二章 アイユーブ警察学校

一. ヴィクトル・ルマール

惑星市民条約機関が改めて惑星全土に共通する太陽暦を定めた年の十月十五日・・・

カルタナの東にあるザクセン自治州タンネン市内、建築家のユルリッシュ・ルマールと妻アンナの間
にヴィクトルという息子が生まれた。

この姓から推測される通り、このザクセン自治州というのは、かつてオルニア大陸にあった旧ジョン
キーユ王国から逃れて、カルタナに住み着いた五百人ほどの人々の末裔であるが、長い年月の間に、次
第にカルタナ民族との混血の数が圧倒し、政治的にも文化的にも、すっかりカルタナ化していた。

ユルリッシュは、建築家として名を馳せていた。カルタナ全土のみならず、オルニアからも依頼を受
けて出向くことがある。そんな時は、自らが設計した帆船で出かけたものだ。ヴィクトルは、そんな父
の仕事ぶりを見て育った。

ヴィクトル十六歳の時、ユルリッシュはザクセン自治州立図書館の仕事を請け負った。書架のところ
どころが高くしてある。

「お父さん、どうして書架の幾つかはあんなに高いのです？あれでは、みんなが本を取れません。」

父親は言った。

「あそこは高くなければ美しくない。高ければ梯子を架けて取れば良いのだ。」

ヴィクトルは、その言葉に違和感を覚えた。

「しかし、図書館は市民が身近に使うもの。外観よりも何よりも使いやすいほうが良いのではありませ
んか？」

「ヴィクトル、お前はまだ一人前ではない。ただ私の言う通りにしておれば良い。建物は美しくあらね
ばならぬのだ。」

それから半年後、ヴィクトルは蓮の花が美しい人工池の傍を通りかかった。そこから見事な用水路が
延びている。それは他ならぬルシャナがまだ特命参与になってすぐの頃に造った池だ。

(ルシャナ様・・・私は貴方のようにになりたい。人のためになることをしたいのです。)

四年後の冬、ヴィクトルが二十歳の時に、ユルリッシュは突然息を引き取った。脳梗塞だった。ヴィ
クトルは、葬儀もそこそこに、父が手がけていた仕事を引き継ぐことになったが、デザインを重視して
設計されていた建物を最低限の手直しで使い勝手の良い造りに直すのに苦勞した。だが、人々はヴィク
トルの建物を賞賛した。



「やっぱり餅は餅屋だねえ。さすがはルマール先生の息子さんだわ。」

「先生は、良い跡取りをお持ちだった。惜しい方をなくしたな。」

ヴィクトルは、父の意図を変えたことに罪悪感を感じながらも、結果的には人々が喜ぶ仕事ができることに満足するのであった。

そんな彼にも、やがて結婚話が持ち上がる。相手は、左官工の親方イニヤス・バルビエの長女マルカ。ヴィクトルとは幼馴染みの、少しぽっちゃりした女性だった。彼が仕事を始めてからはあまり会う機会がなくなっていたが、その親方が積極的にお膳立てをしたのである。

「あの子は太っているものですから、嫁の貰い手を探すにも苦労してるんでさあ。坊ちゃんだったら、見てくれでなく気立てで選んでくれると、あっしは思ってます。」

イニヤスは言った。彼は長年ユルリッシュと多くの仕事をしてきて、家族ぐるみの付き合いだった。

「だけど親方、僕は彼女とは最近あまり会ったことがないですし・・・。」

「それなら、これからどんどん会ってやってくださいよ。毎日お昼を届けさせますから。ね？」

父親は病気で失った二人の息子たちの分までマルカには幸せになって欲しかった。彼の見るどころ、ヴィクトルが最も適任に思えたのである。

「けども親方、一つだけ問題があるんですよ。」

「ほう？何です？」

「僕は、このまま父の仕事を継ぐつもりはないんです。もっと人の役に立つ仕事に変わるかもしれない。そしたら貧乏になるかもしれない。それでも構いませんか？」

イニヤスは彼を見て微笑み、やがて笑い出した。

「なーんだ、そんなことですかい。坊ちゃんなら、大丈夫ですって。・・・坊ちゃん、あっしはねえ、坊ちゃんのお人柄を見込んでるんですぜ。なあに、うちの子はちょっとやそつとでどうかなるような仕込み方はしてやしません。坊ちゃんとうちの子がその気になってくれさえすりゃ、それでいいんです。」

春の日の昼過ぎ、ヴィクトルは、マルカをそれとなく工事現場の近くの公園に連れ出した。

「君は料理が上手だね。君の手料理を毎日食べていたいよ。君は、どうなんだ？僕のことをどんなふうにする？」

彼は、マルカに優しく尋ねた。毎日手作りの弁当を持って来てくれる彼女に、心を寄せ始めたのだ。

「どうって言われても・・・。ヴィクはヴィクだし・・・。でも、お弁当を残さず食べてくれるのは嬉しいかしらね。」

マルカは少しはにかみながら言った。俯きがちな一八歳の娘の表情は、ヴィクトルには初めて見せる顔だった。

「なら、こうしたら、どうかな？」

ヴィクトルは、マルカの唇を盗んだ。彼女は動かなかった。顔が真っ赤になっていた。二人の手が互いの背中に回る。その時マルカは、思いもかけない言葉を口にした。

「ヴィク・・・。今まで言えずにいたけど、実は私ね・・・ずっと貴方に憧れてたんだ・・・。だって、私の周りで、私を相手にしてくれる同世代の男の人は、貴方だけなんだもの。」

「マルカ・・・それじゃ！」

ふた月後、二人は結婚した。



しかし、二人の間には子供は出来なくなってしまった。一度は妊娠したものの、流産して医師からも子供は産めないと宣告されてしまったのだ。子供好きで、大家族を夢見ていたマルカは、たいそう悲しんだ。

「ヴィクトと大勢の子供たちで、賑やかな家庭を作りたいのに・・・。」

ヴィクトルは、妻を慰める。

「マルカ、もし君さえよかったら、恵まれない子を引き取ってもいいんだよ。親子三人、食べていくくらいは何とかできそうだからね。」

実際、彼の仕事は軌道に乗り始めていた。使いやすい建築は徐々に評判を得ていたのである。彼もまた父と同じように、カルタナのみならずオルニアにも出張する生活になった。

そんなある日・・・。

ヴィクトルはオルニアの南西部にあたる海沿いの港町で、子供たちが海岸線にある学校で学んでいるのを目にした。町は比較的大きな湾の奥まった場所に位置している。

「あの、もし・・・。学校が何故このような危ない場所にあるのですか？」

訊かれた町民は、きょとんとしている。

「何故って・・・そんなこと言われてもなあ。昔からここにあるんで。すぐに泳げるし。」

ヴィクトルは、すぐに町長に掛け合った。

「あそこでは、もし津波が来たら危ないですよ！もっと高台に作らないと子供たちが危険です！」

町長は言った。

「だが、町には予算がないんだ。それに、津波が来るとは限らんだろう。」

「それじゃ、金があれば、学校を高台に移転してもいいんですね？」

「そりゃ、まあ・・・。でも、そんな金、どこにあるんだ？」

「僕が工面します！それじゃ、いいですね！僕は建築家です。設計は任せて、町長さんは大工さん達を集めてください。」

「でも、あんた、なんでそこまでやってくれるんだ？何か目的があるんじゃないのか？」

町長は疑りだした。みすみす何にもならないこんな町に金を出す者など考えられない。

「目的は、子供たちの安全です。命は何物にも替えがたい。僕には子供がいません。これからも出来ません。だから、少しでも子供たちを守りたい。お願いします！許可して下さい！」

町長は、彼の熱意に負けた。それに予算がない町に新しい学校ができれば、結構なことじゃないか。

ヴィクトルは、町の大工達を集めて設計図を見せた。費用は全て彼の持ち出しだった。

新しい学校は高台に建った。小さな町には大きすぎる規模で、そこへの道も広くとってあった。

「さて、学校は何と名付けるかね。ヴィクトル学校か？」

町長は言った。

「いえ。僕は何も要りません。・・・でも、町長さん、これだけは約束して下さい。もし大きな地震が起きたら、すぐに学校に避難するように、皆さんに伝えると。」

彼はそのまま去った。

それから三年後、地震が起きて津波が町を含む一帯を襲った。だが、その町の住民たちだけは学校に避難して全員無事だった。支援と慰問に来た若き皇帝・紫政帝は、町長を褒めた。

「よく犠牲者を出さずに済んだな。」



町長は、皇帝にヴィクトルのことを話して、こう言った。

「この町が救われたのは、その若い建築家のお陰です。お褒めの言葉は、彼にお願い致します。勇気ある建築家、ヴィクトル・ルマールに。」

二. 新しい家族

惑星ルシア全体が「惑星市民条約機関」のもとに王制から皇帝制に移行されて二五年後、オルニアでは初代皇帝の子・田所昭（あきら）が即位して紫政帝と号した。

大地震が発生したのは、その二年後だ。紫政帝は、直ちに緊急対策本部を設け、大陸全土から緊急救助隊、医師や支援物資を手配して自ら陣頭指揮を採っていた。一帯は、地震で家屋が倒壊したり、津波に流されていたりして、まるで跡形もないような状態だった。

ヴィクトルが呼ばれたのは、その緊急対策本部の処理がある程度終わって、当該の県庁に権限が戻ろうかという時節であった。

「ドクター・ルマール、よく来てくれた。」

紫政帝は言った。皇帝もまだ若い。もしかするとヴィクトルと年はあまり変わらないのかもしれない。

ヴィクトルは皇帝と同じテーブルに案内されている。皇帝と謁見するとなれば跪くのが普通だが、それが違う扱いをされているのは、おそらく自分がオルニア国民ではないからだろうと彼は思っていた。

「比度の地震は、我が国においても甚大なる被害をもたらした。だが、貴方のお陰で、数多くの尊い命が救われたと聞く。心より礼を申す。」

紫政帝は謝意を述べ、頭を下げた。ヴィクトルを同じテーブルに案内させたのは、心からの感謝の意を伝えるためだったのだ。

「数年前の学校の建築費はオルニアの総意として支払わさせてくれ。少し上乘せさせてもらうつもりだ。」

そして、できれば是非とも復興のために、力を貸してもらいたいと思っている。この一帯を災害に強い街づくりの模範としたいのだ。その際も報酬は別途支払う。頼めないだろうか？」

ヴィクトルは快く引き受けた。誰かからの依頼があってもなくても、もとより彼は復興のために、何かしたいと思っていたのだ。

しかしその際、皇帝があまりにもいろいろと尋ねてくるので、とうとう自分たち夫婦にはもう子供が出来ないことや、妻がとても悲しんでいることまで話すことになってしまった。

「どこかで、恵まれない子を引き取ろうかと思っております。」

と、彼は言った。紫政帝は少し考えてから、何やら侍従に指示した。しばらくして、先ほど席を立った侍従が一歳くらいの男の子を抱えて戻ってきた。紫政帝は、自らその子を抱え、ヴィクトルに受け取らせた。

「この子は、別の村で保護されて、ここに来た子だ。残念だが、身元が不明でね。私が連れ帰ろうかと思っていたのだが・・・。」

よかったら、君が育ててやってはくれまいか。」

男の子は、ヴィクトルの顔を見て笑った。なんて可愛いだろう・・・ヴィクトルは心からそう思った。

「紫政帝陛下・・・。この子は、私を見て笑っております・・・。本当に引き取らせていただいてよろ



しいのですか？」

「頼んでいるのは、私のほうなのだがね。」

ただ、この子は本当の名前も分からない。わかっているのは、その上着の一部に天秤の絵が縫い付けられているということだけだ。量り屋の子か……。あるいは弁護士の子という可能性もあるが。」

弁護士は、公平を期すという意味を込めて、しばしば天秤を印に用いることがある。

「天秤ですか……。」

紫政帝は、ひとつの名前を口にした。

「その子の顔立ちや服装から見て、旧総典王国領内の子だとは思われるが、とりあえずライブラと名付けてある。」

元々の意味は天秤だが、その名はこの太陽系の惑星のひとつでもある。願わくば星の加護を受けて元気に育つようにね。」

この物語の舞台となっているサルナート太陽系には、ルシアの他に七つの惑星がある。ライブラは、その中でも最大級の惑星の名であった。

「ライブラ……。」

カルタナの家にも男の子を連れて帰ると、マルカはたいそう喜んだ。なかなか離そうとしない。

「たまには僕にも抱かせろよ。その子は僕の子でもあるんだからさあ。」

ヴィクトルがそう言って取り合いになった。

「だめだめ。まだお父さんには任せられませんよーだ！ねーえ、ライブラ。」

マルカは、笑いながら子供をあやした。

「マルカあ！頼むよーお！」

周りの人々は、そんな親子を微笑ましく見守った。

ヴィクトルの一家は、紫政帝の希望で、オルニアの首都・湯井岡市内から二〇里ほど西にあるカルタナ人居住地ヨハンシュタット市に移住した。

被災地の街づくりには、数年かかると思われたし、オルニアからは他の六大陸と行き来する航路が整備されていたため、彼にとってもそのほうが都合が良かったのだ。

そのうちに、彼は誰からともなく『環境設計家』と呼ばれるようになった。自然を生かし、人にも優しい街並みを造る……その姿勢と有効性はとても好意的に評価され、彼の名はオルニア全土に知られるようになったのである。

翌年、彼はライランカ人が多く住むアリオルカ地域の整備を依頼された。

そこで、一人の赤子と出会う。その子は、五〇歳くらいの女性に抱かれて移動しているところだった。親子にしては年が離れすぎているので、話しかけて事情を尋ねると、女性は町の保健婦で、その子の両親と兄が事故で亡くなり、女の子はこれから孤児院に連れて行かれるところなのだという。

「もしよろしかったら、私にその子を育ててくれませんか？私はヴィクトル・ルマール。環境設計家です。」

保健婦は、改めてよくよく相手の顔を観察した。その環境設計家の名は知っている。顔を見れば、確かにあの著名な設計家本人のようだ。本当は子供たちのためには、優しい里親を探して育ててもらったほうが良い……。



保健婦は、ヴィクトルを保健所に案内して、所定の手続きを済ませてから、藍色の髪をしたその女の子を預けた。どうやら純粋なライランカ人らしい。

「ドクター・ルマール。どうかこの子をよろしくお願いします。名前はカーサルです。」

カーサルか・・・また惑星と同じ名前とは・・・。ライブラのことと考え合わせると、何という偶然だろう。

(ヴィクと大勢の子供たちで、賑やかな家庭を作りたかったのに・・・。)

マルカの言葉が、彼の頭をかすめる。

もしも、この世に運命というものがあるのなら、惑星の数ほどの子供たちを育てるのが僕の運命なのだろうか？ そうだ、子供たちを集めて、僕の技術や考え方を世界各地に広めよう。環境保護と世界平和、人類の未来のために・・・。

彼は世界各地を巡って、オルニアとライランカを除く五カ国の孤児院からそれぞれ一人ずつ子供を引き取った。

ただ、ウユニの孤児院から女の子を引き取った時には、高官との交渉を強いられた。ウユニの衛生福祉局長官シャーリプが、自国民の子を国外に出すことを渋ったのだ。

「我が国の国民は、その特徴ゆえに他国では差別を受ける可能性が高いのです、ドクター。」

彼は悲しそうに言った。

「見たところ、子供たちは普通のようにですが・・・。」

「子供の頃は何もありません。しかし、その身体は大人になる時に変化するのです。だいたい一五歳か一六歳頃ですが。」

「それでは、その頃までは良いのですよね？ きっと独り立ちが出来るまでに育てますから。私が子供たちを集めているのは、私の環境設計の技術を広めるためなのです。お国の人たちの為にもなんとかお願いします。」

シャーリプは、ヴィクトルの心を覗いた。彼は類い希なる読心能力の持ち主だったのだ。

「分かりました。貴方を信じましょう。孤児院にいる子供の中から、最も賢い子を託します。くれぐれもよろしくお願いします。」

そしてムームという女の子が選ばれた。

そうして、両親と七人の子供たちはひとつの家族として仲睦まじく暮らすことになった。以下に、その七人の子供たちの出身国と名前を記しておく。

穀倉地帯・オルニアの	ライブラ (長男)
森と湖の国・ライランカの	カーサル (長女)
海洋貿易国・カレナルドの	サラサ (次男)
音楽の国・カルタナの	スイレン (次女)
砂漠のオアシス・マクタバの	ホルス (三男)
科学技術立国・アルリニアの	ルトフ (三女)
不可思議の国・ウユニの	ムーム「四女」



三. 巢立ち

子供たちの部屋には、積み木だの人形だの絵本だのがたくさん並べられている。しかし、散らかってはいない。散らかっていいものなら、ヴィクトルから厳しく叱られるからだ。

「使ったら、必ずきちんと元に戻しなさい。次の人が困るだろ。」

サラサとホルスがふざけて追いかけてっこをしている。

「こらーっ！待てー！逮捕するー！」

「やーだよっ！天下の怪盗ホルスが捕まるもんか！」

カーサルが大人ぶって溜息をつく。ルトフとムームは絵本を読んでいる。

「これだから男の子は嫌よね。静かにできないのかしら。」

「まあ、しょうがないじゃないか。遊べるのは今しかないんだ。」

ライブラが言った。

「なんで？」

スイレンが尋ねる。

「もうすぐ僕たちは学校に入って、勉強しなきゃいけない。父さんから、お前たちはその他にもいっぱい勉強しなきゃいけないんだって、聞いてるんだ。そしたら、今みたいに遊べるかどうかわかんないんだ。」

「そうなんだ・・・。」

ライブラは、スイレンの手を引っ張ってホルスたちのほうに向かった。

「僕たちも遊ぼう！」

その様子を、マルカは見ていた。

「ヴィク、本当にあの子たちに環境設計や剣術まで教え込む気？何だか可哀想・・・。」

「勉強は辛くなるかもしれない。でも、それが将来あの子たちや周りの人々を幸せにすることになるんだ。」

マルカ、その時には君があの子たちの心を温めてやってくれ。あの子たちは、きっと乗り越える。」

ヴィクトルは、六年間は普通の勉強を、もう八年間は環境設計学を子供たちに熱心に教えた。剣術は家庭教師を付けた。紫政帝に頼んで、最高の剣術家を紹介してもらったのだ。

「実は、私は忍びの者です。」

その剣術家・佐竹織部は夫婦に言った。ヴィクトルは、忍びが何かを知らなかったので、いろいろ質問した。

忍びの者・・・それは、あらゆる手段を講じて、偵察や情報操作、暗殺など、人の目に触れてはならない仕事を専門とする影の集団である。剣や槍、弓矢は言うに及ばずあらゆる武器や道具を駆使して任務を遂行する。故に、その存在は皇帝とごく限られた人間にしか知られていない。戸籍も作られることなく、あくまでも秘められた存在のままで一生を終えるのが最終的な使命なのだ・・・。



「つまり貴方は最高の剣術をお持ちであり、皇帝陛下直属の部下なのでしょう？それなら、子供たちの家庭教師には最高だ。どうかよろしくお願いします。」

「ありがとうございます。こちらこそご厄介になります。」

彼は住み込みで家庭教師を務めた。

子供たちには、本当に厳しい日々だった。学校のテストで九〇点以上は当たり前、それ以下だとヴィクトルの雷が落ちて、間違えたところを本当に理解できるまで復習させられる。さらに、織部からは剣術の稽古でしごかれる。高学年になると、ヴィクトルから環境設計学の講義だ。

だが、ヴィクトルは、子供たちに常日頃からこう言っていた。

「愛する子供たち。私がこうしてやれるのは、お前たちが一五歳になるまでなのだ。

お前たちが一五歳になった時、私は自分の意思に反してでもお前たちを手放さなければならない。

だから、その時まで独り立ち出来るように頑張れ。自分の身は自分で守り、環境設計家として各国の皇帝陛下に仕え、その国の人々のためになる仕事が出来ようになっておくのだ。お前たちなら、それが可能なのだから。」

その言葉を聞く度に、子供たちは父親からとても愛されていることを感じ取るのだった。

また、母マルカの手料理が子供たちには何よりも楽しみであったし、ウユニ人のムームは成長するにしたがって、心を読む力が増していた。彼女は、両親の心を読んで、他の子供たちに密かに伝えていた。「お父さんとお母さんは、私たちが本当の子供と同じように思ってくれているわ。でも、一五歳になると、私の姿が変わって周りの人たちから虐められるかもしれないから。だから、その頃までには帰国させるって約束で私を引き取ったみたい。ごめんね、私のせいなの・・・。」

泣き出すムームを、ルトフが抱く。

「貴女のせいじゃないわ。・・・運命なのよ。」

ライブラが言った。

「手放すなら、みんな同時に、か。確かにそのほうがいい。父さんは正しいと思うよ。僕たちが頑張れば良いんだ。」

母マルカは根っからの子供好きに加えて、とても明るかった。そして、誰かが熱を出したりした時には、つきっきりで看病したものだ。

子供たちが概ね一五歳に達しようかという頃に、ムームが高熱を出した。一晩かけても熱が下がらない。二日目の夜、ライブラが用を足しに起きて部屋の前を通りかかると、マルカがムームのベッドの横でうとうととしている。そこへ、ちょうど別の廊下からヴィクトルが入って来た。

そのまま見ていると、ヴィクトルはムームの額に手を当てて様子を見てから、マルカの体に毛布を掛けた。

「すまないな、マルカ。ムーム、頑張れよ。こんな時に僕は君たちに何もしてやれん・・・。」

ライブラは、静かにその場から離れた。

(父上・・・。母上・・・。)

この頃には、子供たちは言葉遣いも立ち居振る舞いもすっかり大人に近くなっていた。

ムームの熱は翌朝下がった。念のためにもう一日学校を休んだが、またいつもの猛特訓が始まった。しかし、どうも子供たちの様子が違う。より熱心に取り組むようになったようだ。さらに半月ほど様



子を見てから、織部はその理由を訊いてみた。

「君たち、何かあったのかい？前より断然熱がこもっている。」

ホルスが答えた。

「父も母も、僕たちを本当に思ってくれてますから。期待を裏切っちゃいけないんです。」

「君たち・・・。」

カーサルが説明する。

「このあいだムームが熱を出していた時、母はずっと傍にいて、そこへ父が来て毛布を掛けたんだそうです。二人にすまないと言って。ライブラ兄（にい）がそう言ってました。」

「はい。その通りなんです、先生。」

その夜、織部はヴィクトルとマルカにその事を話した。

「そうか・・・。あれをライブラに見られていたのか。気がつかなかった。」

ヴィクトルは嬉しそうに微笑んだ。

「でも、ヴィク。ムームはそろそろ帰さなくてはいけないのよね。他の子たちも・・・。」

マルカは泣き出しそうな顔で言った。

「ああ。もうぼちぼちその時かも知れん。・・・織部さん、子供たちの剣の腕はもう大丈夫ですね？」

「はい。剣術試験を受けたら、恐らく二級は取れます。特にホルス君は先が楽しみですよ。」

「本当にお世話になりました。皇帝陛下にどうかよろしくお伝えください。」

「かしこまりました。それでは。」

織部は闇へと去った。

織部がいなくなったことで、子供たちも親元を離れる時が来たことを悟った。

ライブラが子供たちを代表して言った。

「父上、母上。僕たちはもう行かなければならないのでしょうか？ムームは心が読めるのです。父上と母上の心も読んで、僕たちに知らせてくれていました。だから、もう覚悟はできています。」

ヴィクトルは静かに頷いて、子供たちひとりひとりを見つめた。

「その通りだ、ライブラ。まさかムームに心を全て読まれていたとは思わなかったが・・・。」

だが、君たちが優しく賢く強く育ててくれたことは、私たちにとっても幸せだった。私もマルカも、君たちを愛しく思っている。できればこのままずっと傍に置いておきたいくらいね。

しかし、どんな出会いにも別れはやがてやって来る。・・・

十日後、私たちはオルニアを発つ。その時には、ライブラ、先ず君がこの家から巣立つんだ。

いいか、必ず幸せになれ！私は確かに君たちに環境設計家としての務めを託そうとしている。しかし、何よりも大切なのは君たち自身が幸せになることだ。いつか愛する人ができたら、その人を全力で愛し抜け！務めはその次だ！

そして、忘れるな。たとえ離れて暮らしても、私もマルカも、君たちをずっと見守っている！」

マルカが子供たちひとりひとりを抱きしめる。彼女も子供たちも泣いていた。

旅立ちの日・・・。

「それでは、父上、母上・・・。今までありがとうございました・・・。」

「うん。気を付けてな。また会おう！」



「ライブラ。くれぐれも元気でのよ。」

「はい……。それでは。」

他のきょうだい達とも抱き合っただけで別れを告げると、ライブラは湯井岡市の方へ歩いていった……。

四. 母の肖像

惑星ルシアでは、馬車は特別な乗り物ではなく、人力車と同じくらい市民の移動手段として広く普及している乗り物である。機械仕掛けの車は工業地帯で走っている電気自動車や穀倉地帯のトラクター、貨物船と旅客船、それにいわゆる緊急車両だけだ。

ライブラは、乗合馬車を何度か乗り継いで、二日後に湯井岡市に辿り着いた。ヴィクトルから、まず紫政帝の元を訪ねるように言われていたのだ。

宮殿・明禅館の入口で、ヴィクトルからの手紙を警護官に差し出す。

「ヴィクトル・ルマール？……ああ、あの環境設計家の……。わかった。待っていなさい。」

警備官の一人が中に入っていった。

(警護官かあ……。憧れるなあ。)

実は、ライブラは警察官に憧れている。きちっとした身のこなしで人々の安全を守る……。環境設計家もいいけれど、警察官にもなりたかった。

宮殿内部は、外観と同じように質素な雰囲気だった。通された所は謁見室だ。

「皇帝陛下は、まもなくおいでになります。」

案内してきた事務官が言う。彼は跪いて待つ。

紫政帝は、少し息を切らしながら入ってきた。どうやら小走りであらう。まだ四十そこそこに見える。呼吸を整えながら、彼を見つめた。

「ライブラ……。だね。」

「はい、皇帝陛下。お初にお目にかかります。ヴィクトル・ルマールの子・ライブラと申します。」

ところが紫政帝は、ライブラの近くまで寄ってきて、こう言った。

「実は、君と会うのは初めてではないのだ、ライブラ。君をドクター・ルマールに預けたのは私なのだよ。」

「えっ?!」

紫政帝は、ヴィクトルに彼を託した経緯を説明した。

「それでは、陛下が僕を……。どうもありがとうございます。」

「あの時に抱えていた子が、こんなに大きくなったか……。」

あれから、私は君の身元を改めて調べさせた。君は地元の子ではなかったため、何年もかかってしまったのだ。

君の本当の名は、加賀篤史。お父さんがご存命だ。君が来る日をドクターが知らせてくれていたので、もうここに呼んである。……。加賀君をここへ。」

一人の男性が入ってきた。凛々しい顔立ちをしていたが、それが崩れる。



「篤史・・・だね・・・。」

彼は、呆然としているライブラの右袖を捲った。そこにほくろがあるのはライブラ自身も分かっている。

「篤史・・・。お父さんだよ。」

加賀信頼は、ライブラを抱き寄せた。

「お父・・・さん・・・？」

ライブラは夢見心地だった。自分がヴィクトルとマルカの本当の子ではないとは知っていても、実の父親と会うことなど予想もしていなかった。

「お前は、お母さんと帰省中に地震に巻き込まれたのだ。お母さんは残念ながら亡くなった。私が現場に着いた時には、お母さんはもう冷たくなっていた・・・。一緒にいたはずのお前は、いなくなっていた。てっきりお前も死んでいるものと思っていたのだが・・・。」

言葉が途切れた父親のあとを、紫政帝が続けた。

「私はそれと知らずに君をドクター・ルマールに預けた。上衣の柄とお父さんからの情報を照らし合わせて身元が分かった時には、もう八年も経っていてね。

そのまま君をドクターに育ててもらって、お父さんには待ってもらっていたのだ。きっと、この日を一番心待ちにしていたのは、お父さんだったと思うよ。密かに何度も見に行きたらしい。」

「皇帝陛下、ご意志に背いて申し訳ありませんでした。しかし、一目だけでもと・・・。」

「良い良い。親なれば当然だ。だが、ドクターが子供たちを一五歳で手放すと分かっていたからな。それに、ライブラ・・・篤史自身に動揺を与えるのは良くないと思ったのだ。

もう何も構うことはなくなった。己が子をしっかりと抱いてやれ。篤史の戸籍は復活させておく。

ライブラ・・・いや、篤史、また会おう。」

紫政帝は、部屋から出て行った。

・・・ここからはライブラを篤史と呼ぼう・・・

信頼は、篤史を自宅に連れ帰った。湯井岡市内のアパートメントの一室だ。

「でも、お父さん・・・僕にはまだ不思議なことがあるんです。」

篤史は、父親に尋ねた。父は、やっと会えた息子を膝の間に座らせている。

「何だね？」

「僕と一緒に育てられていたウユニの子には心を読む力があって、周りの大人たちのことを全部教えてくれていたのに、僕にはお父さんのことが分からなかった。何故でしょう？」

「ああ、ムームという子か。」

「知ってたんですか？」

「うん。実はお前を見に行っていた時に、あの子に見つかってしまってね。でも理由を話したら、あの子は敢えて他の子には伏せておいてくれたのだよ。

それから、佐竹さんという家庭教師。あの人も勘が鋭いね。つまり、私がお前を見に行っていたことを知っていたのは、その二人とドクター・ルマール夫妻だけだった。」

「そうだったんですか。それでは、貴方は本当にお父さん・・・。」

「なんだ、まだ疑っていたのか。大丈夫だ。私はお前の父親、それで正しい。」

「お父さん・・・。」



篤史は、背中越しに伝わってくる父親の温もりをしっかりと受け止めた。

信頼は、一枚の肖像画を息子に見せた。篤史は、それをじっと見つめる。

「篤史、これがお母さんだ。名前は里子（さとこ）。優しい人だった。お前はお母さんに似ている。とつてもね。」

「お母さん・・・。」

知らぬ間に涙がこぼれていた。

信頼は、篤史の希望を聞いて、彼を大学の法学部に進ませた。篤史は、やはり警察官になる道を選んだのだ。紫政帝には、こう説明した。

「このまま環境設計家として陛下にお仕えするとなれば、少なからず政界の渦に巻き込まれるでしょう。」

しかし私は、そのようなことには向いていないと自分で思うのです。そしてもし権力闘争に負けたら、せつかくの環境設計の技術が無駄になってしまいます。

出来れば、秘密裏に陛下にお仕え致しとう存じます。」

紫政帝は答えた。

「わかった。それでは、君を私の個人的な補佐として召し抱えよう。その際は、ライブラと名乗って明禅館に来るが良い。」

五. 魔の海域

ヴィクトルとマルカは、所有する帆船「セ・アンファン号」で子供たちを祖国に帰すための旅に出た。

ヴィクトルは、その時点で初めてライブラの身元が判明していたことを他の子たちに明かした。

「落ち着いたら、オルニアの湯井岡市で『加賀篤史』という名前を探せ。それがライブラだ。少なくとも紫政帝陛下は行方をご存じのはずだ。私の名前を使えば会える。」

ライランカではカーサルが船を下りた。時の皇帝ホルヘに彼女を面会させると、皇帝は直ぐさま彼女を帰化させて、環境局長官ラルフ・カークスキに引き取らせた。ライランカでは、外国に生まれた者は、たとえ両親が共にライランカ人であっても、帰化礼を受けなければ本国では永住することができない。名前も、イリーナと変わった。

マクタバではホルスが、カレナルドではサラサが、カルタナではスイレンが、アルリニアではルトフが去った。残るはウユニ人のムームだけだ。

「ずいぶん寂しくなりましたね、父上。」

ムームが寂しげに呟く。

「いつか、カーサル姉（ねえ）がうるさいって溜息をついていましたが、いざそうになってしまうと悲しいです。」

「ムーム・・・。お母さんも、貴女を手放したくはないわ。お母さんね、大家族が好きだったの。だから、とっても楽しかった・・・。思い出をありがとう・・・。」



マルカが優しく抱きとめる。

「ムーム、君ともお別れだ。元気であるんだぞ。」

ムームはヴィクトルにもしがみついた。

「父上……。お名残惜しゅうございます……。今まで、ありがとうございました。ムームは幸せでした……。」

ウユニ皇帝・バマカンは、引退した元衛生福祉局長官シャーリップの希望により、彼と面会した。彼の手を通して、ヴィクトルからの手紙を読む。

「すると、ここに書かれているムームという子は、環境設計家の卵なのだね。」

「御意。ドクター・ルマールは、その時の約束を守って、その子を覚醒前に帰してくれたのです。今は、拙宅にて過ごしております。陛下のお許しがあれば、ぜひとも我が娘としたいと思っております。何卒お許し下さいますよう。」

「そうか。先が楽しみだな。時折地形が変わってしまう我が国には、まだそのような学問はない。養女の件は聞き届けて使わす。」

「は。有り難き幸せ。」

ムームの身体に変化が起きたのは、その年の冬だった。シャーリップの妻・エンネアが見守る中で、彼女の耳は狐になり、ふさふさした尾が生えた。

「ムーム、貴女も獣族になったのね。」

エンネアもまた半身狼の獣族だった。耳や牙、尾を持っている。

ウユニ人たちは、成長すると、遺伝に依らず霊族、竜族、魚族、鳥族、獣族などに変化する。そのうちのいずれになるかは、覚醒してみないと分からない。混合した形の者もいる。特殊能力も、テレパシー、テレキネシス、読心力、千里眼、飛行、落雷、空間操作など様々である。

そのムームが、シャーリップの息子・カンゼノと結婚したのは、それから五年後のことだ。父親が喜んだのは、言うまでもない。

「カンゼノよ。浮気などしてみろ。ムームはたちどころに見破るぞ。怒らせると母さんくらい怖いからな。」

ムームは顔を赤らめた。

「お、お父様……。お戯れを……。彼に限って、そのようなことは……。」

カンゼノは新妻を庇った。

「そうですよ！私はムームを愛してます！血の繋がりのない妹から、かけがえのない妻に変わったのです！彼女を傷つけるようなことは言わないで下さい！たとえ父上といえども、許しません！」

息子の見届に父親は圧倒された。

「すまんすまん。冗談のつもりだったのだが。許せ。」

ムームは幸せな生活を送りながら、その数年後には正式に環境局長官に就任して、国土の一層の発展に寄与した。

ムーム二八歳の冬のある日、一艘の帆船が遭難、生存者は発見できず、との情報が入った。そこは地元のウユニ人たちでさえ魔の海域と恐れるタルカンマ海峡だ。船名を知ったムームはうろたえた。



「これは！父上の船？！」

ムームは、直ぐさまオルニアの兄・篤史に電報を打った。当時オルニア警察庁所属の警視になっていた篤史は、他のきょうだい達に集合するように伝えた。

ムームは、運び屋にテレポートで運んでもらって、指定の日時に待ち合わせ場所の森の広場にやって来た。人気のない場所の一角で、ベンチに腰掛けている男が二人いる。

「兄上？兄上、ムームです。」

二人は顔を上げた。

「ムームか。ライブラだ。」

「俺はホルス。お前、まるで狐みたいになったな。」

他の四人も間もなく合流した。

「それで、父上たちが遭難したというのは、確実なのね？」

カーサルが尋ねる。

「はい・・・。私も現場に近い浜辺で船の残骸を見せてもらいました。父上たちの船に間違いありませんでした・・・。打ち上げられた人たちの中には、父上も母上も見つからなかったけれど、あの海が荒れて助かった例はないと・・・。」

ムームは声を詰まらせ、一同は静まり返る。ルトフやスイレンは泣き伏した。男たちも涙をこらえている。

やがて、カーサルが二人の墓標を作ろうと提案した。一同は賛成して、役割を割り振った。

それから、めいめいが自分の今を語った。・・・

六. ライランカの姫君

十年後・・・。

オルニアの紫政帝は、隣国ライランカのファイーナ姫から一つの依頼を受けた。二年間で後継者を育成したいという内容だ。

ライランカのアルティオ帝のひとり娘・三歳歳のファイーナ姫は、今年に入って不治の病とされるグナンリラ病で余命五年との宣告を受けていた。自ら子を産み、育てられる時間はもうない。ならば、若者たちを育成して後を継がせるしかない、と考えたのである。

そして、できればそれは、彼女を皇女だとは知らずに、素顔で接してくれる若者たちの中から選びたい。それには、人口が多く、ライランカの文化に馴染める可能性が高いオルニア人が最も適しているのではないか・・・。そのように思って、彼女はオルニアを訪れたのであった。

父帝も、限りある命となった娘との時間を惜しんだが、公のためにはやむを得まいと了承してくれた。

そういうわけで七月一二日の今日、ファイーナはオルニアの港町に降り立った。ライランカ人独特の藍色の髪をゆるやかに束ね、左手にキャンバス地のトランクを下げている。

紫政帝とその皇太子の田所風馬が、彼女を迎えに来ていた。

「ファイーナ姫、ようおいでになった。」



「紫政帝陛下、風馬殿下、お久しぶりでございます。ご健勝で何よりと存じます。そして、このたびのご厚意には感謝してもしきれませぬ。

されど、ここでは『ファイーナ』の名は・・・。」

「おお、そうであったの。すまぬすまぬ。さて、なんと呼ぼうかのう。まずしばらくはゲストルームにご滞在ください。その間にゆるりと事を進めればよい。」

「どうもありがとうございます。」

翌日から、ファイーナと紫政帝、風馬皇太子は夕食を共にしながら今後について話すようになった。

まずファイーナはオルニアにいる間、ソフィアという名を名乗ること。オルニアには移民戸籍制度が設けられていて、犯罪に利用されないと認められれば、新たに戸籍を作ることが出来る。これは、民族的迫害を逃れて他国に逃げてきた人々の救済を目的に、かのルシャナが考案したものの一つであり、世界有数のオルニア穀倉地帯は、それを実現できる余裕を有している。実際に、オルニア国内には他国からの移民で構成されている市や町が幾つか点在している。

「後継者育成の場として、警察学校を検討しているのじゃが、如何かな？」

紫政帝は言った。

「実は、かねてより警察官の質を上げようと考えておりましたな。貴女もその中で講師をしながら後継者を見つけられたら宜しかろうと存ずる。」

「どうもありがとうございます。どうか陛下のおぼし召しの通りに。何卒よろしくお願い致します。」

ソフィアは同意した。正義を守る警察官の中から将来の皇帝を生み出せれば、それに勝ることはあるまい。

紫政帝にとっても、より高度な警察官を育成できるまたとない機会となる。

犯罪者たちの中には、腕の立つ者たちがいる。殉職する警察官も少なくない。それ故に、かねてから高度な警察学校の創設を考えていた。

また、領内には忍びの者たちが存在する。戸籍すら持たない彼らを、数年前にようやく解放できたばかりだ。よもやとは思うが、これから犯罪に手を染める者が彼らの中からも出ないとは限らない。それと同等かそれ以上の力を持つ警察官が欲しかった。

こうして、ソフィアは警察庁において近く行われる高等警察官資格試験を受け、警視の資格を取ることになった。もちろん、その時にはソフィアの身分は隠されて厳正な審査が行われる。

高等警察官資格試験の前夜、模擬試験の復習をしていたソフィアは、ふと窓から空を見上げた。満天の星が輝いていた。

七. 再会

「さて、と。」

面接試験で口火を切ったのは、加賀篤史警視正だ。

高等警察官資格試験は、筆記試験と剣術試験、それに面接で合否が決められる。幼き頃より将来の君主となるべく育てられてきたソフィアは、三級剣士の資格も取っていたし、法令関係の試験は容易かつ



た。問題は如何にして面接を突破するかだけなのである。

面接官は五人いて、うち一人は女性だった。

「筆記試験は満点ですが、あなたはなぜライランカからわざわざいらしたのですか。」

篤史から矢継ぎ早に質問が飛ぶ。

「はい。今回は皇帝陛下が新しく警察学校をお作りになると伺い、一人の法律家として、どれだけ司法に貢献できるかを実践したいと思いました。」

「そのお話は、我々も聞き及んでおります。ですが、警察官と法律家とは、少し異質な性格を持つ職業だとはお思いになりませんか。」

「いいえ、警察は市民も犯罪者も、そしてもちろん自分の命も守らなければ、使命を果たしたことにはなりません。法律家もまた、一人でも多くの命を救うために法律を作り、常に走査し続けるのです。また、現場を知らずして机上でのみ法令を作ったり論じたりするのは、無意味ですわ。今回の警察学校は、すべての点において最高を目指されるとか。このような貴重な機会に私もぜひ参加させていただきたいのです。」

「なるほど、よくわかりました。それでは後ほどまたお呼びします。」

同席していた女性警視・大谷好子は、篤史の質問の仕方に違和感を覚えた。今日はいつになく厳しいのだ。

(普通は、これほどまでには突っ込んだりしないのに……。彼でも機嫌が悪い時があるのかしら。でも、そんな風には思えないし……。何だか変ねえ……。でも、今日の彼女はそれに見事に対応している。凄い人だわ。)

二時間後、ソフィアが好子に促されて更衣室に入ると、彼女と同じ制服を渡された。

「これは……。」

「そう、あなたは合格したの。今日から私たちは仲間。私は大谷好子、貴女と同じく警視よ。よろしくね。」

好子は小さくウィンクしてみせた。

「ありがとうございます。ソフィア・テジェスです。よろしくお願ひいたします。」

程なくして、先ほどの面接官たちと皇太子の立ち会いで、簡単な任命式が執り行われた。風馬は微笑んだ。

「合格おめでとう！期待しているよ。」

「は！」

ソフィアは敬礼した。

そのきちっと型にはまった清々しさに、風馬は内心、さすがは姫君だと感心した。これまでは互いに将来皇帝となる者として外交的な親睦を重ねてきた。少し年上の彼女は、彼には眩しく映っていたものだ。

その夜、ソフィアは皇帝の謁見室に喚ばれた。それまでの打ち合わせの場とは明らかに異なるし、公式な謁見にしては夜という時間帯は不自然である。

「合格おめでとう。」紫政帝はにこやかに迎え入れた。



「ありがとうございます。」ソフィアが応える。

「実は会わせたい者があって、来てもらいましたのじゃ。・・・おはいり。」

「はっ、失礼つかまつります。」

比較的薄い中扉を開けて一つの人影が現れる。

「あなたは・・・。」

彼女は息を呑んだ。声の主は、加賀警視正だったのだ。

「ファイナ姫さまには、実に聡明でお美しくご成長あそばされましたね。」

篤史は跪いた。その目は彼女が昼間見ている厳しい眼差しとは違う。懐かしい者を見つめるような優しいものだった。

「あなたは私のことをご存じなのですか？」

「もう一五年ほど前になりましたでしょうか、お目にかかったことがございます。ヴィクトル・ルマールの子・ライブラとして。」

紫政帝が言った。

「実は、件の警察学校の校長をこの篤史にやってもらおうかと考えておりますのじゃ。いかがですか、姫。」

「え・・・。あ、はい、私がかまいませんが。しかし、確か、ドクター・ルマールは環境設計学を極めたお子様達を各国に補佐役として置かれたと伺っております。そんなお国の大切な方を・・・。」

ライランカでは、イリーナと名を変えたカーサルが環境局長官となって環境をよく整え、皇帝の参謀と呼ばれている。ソフィアも、そのイリーナから、ドクター・ルマールについて多くを聞いていた。篤史ことライブラもおそらくオルニアにおいて欠くことのできない存在になっているに違いない。

紫政帝は言葉を続けた。

「姫、この度作る警察学校は、殉職する警官をなくしたいという私自身の願いでもありますし、惑星全体の利益にも適います。そして、この国でそれを任せられるのは篤史しかいないのです。」

篤史も熱い思いを語る。

「私は、父から環境設計学を教わり、皇帝陛下にお仕えしてきました。しかし、環境設計学は必ずしも国全体のためにあるものではありません。警察官達にも身につけてもらって、社会の治安に役立てることも可能だと思うのです。」

さらに、たいへん不躰な言い方をお許し頂けるならば、紫政帝陛下も風馬殿下も、既に私の知識を十分に吸収されておられます。私がお二人にお伝えすることは、もはやほとんどございません。

これからは、警察学校の校長というお役目を果たしていく所存でございます。それに加えて、姫様、貴女様をお守り致します。」

紫政帝も篤史も、ソフィアに力強く頷いた。思いはひとつなのだ。

「どうもありがとうございます、紫政帝陛下、加賀警視正。」

紫政帝はすでに幾人かの教官役を揃えてくれていた。

国立科学研究所に勤務している、科学技術立国・アルリニア出身の周公沢、言語学者・小久保美穂、忍びの里から来て戸籍課に勤務している春野亜矢、そして剣術の家元の家系に生まれた警察官セルジオ



・カルルと滝田光昭という顔ぶれだ。

公沢は科学捜査の講義を、美穂は人とのコミュニケーションの講義を、その他三人は武術系であり、それにソフィアの法律学と篤史の環境設計学が加わる。

八. 新たな出会い

それからしばらくのあいだ、ソフィアは非番になると明禅館に来る篤史とも話し合うようになった。「私に加賀篤史という名前と呼ばれるようになったのは、ヴィクトル・ルマールの元を離れてからです。」

彼は、母親と帰省していて大地震に巻き込まれ、ヴィクトルに引き取られたこと、巣立ってから紫政帝のお陰で実の父親に会えたこと、彼が三歳歳の時にルマール夫妻が遭難したことなどを話した。実父は、息子が警視正にまでなったことを見届けて安心したかのように、五年前に膵臓がんで亡くなっていた。

(お前に会えて、何年も一緒に暮らせたことを幸せに思っている。ありがとう、篤史……。)

それが最期の言葉だった。

「私も母を亡くしています。……貴方のお父様たちも、思い出となって今でも見守って下さっていますよ。」

ソフィアは言った。彼女の胸の中にも、亡き母が今も生き続けているのだ。

「ありがとうございます、姫様……。」

篤史は、深く頭を垂れた。

二人は、来たる警察学校開設に向けて、廊下側がガラス張りになっている会議室で打ち合わせを重ねている。

「お願いですから、姫様と呼ぶのはお止め下さい。誰かが聞きつけるかもしれませんわ。どうかソフィアと。」

ソフィアが懇願した。皇帝候補が決まるまで、自分の身元は決して明かされてはならないのだ。

「分かりました。……では、ソフィア警視、開校まで二人で手分けして、これほと思う人を探そう。」

篤史はそれ以降、警視正として部下の警察官に接する時の言葉遣いになった。

戸籍係に勤める春野亜矢と面談したのは、打ち合わせ三日目のことだ。亜矢は、彼女と会うなり、その場で跪いた。

「ファイナ様でいらっしゃいますね。春野亜矢と申します。私は忍びゆえ、姫様のお顔は存じ上げております。何卒よろしくお願い申し上げます。」

ソフィアは驚いた。

「忍びの者たちのことは承知していましたが、他国の王族まで知っているのですか。」

「はい。数年前までは各地で情報収集もしておりましたので。私の元の名は楓と申します。」

この度、紫政帝陛下より、警察学校の講師を命じられました。」

「そうですか。よろしく申し上げますね。ところで、貴女はどうして戸籍係に？」

「実は、生き別れになっている許嫁を探しているのです。たまたま皇帝陛下にお目にかかる機会があり、それでは許嫁が立ち寄るかも知れぬ戸籍係に勤める気はないかと言って下さいまして。」



「そうですか。会えると良いですね。きっと素晴らしい方なのでしょうね。それで、その方のお名前は
何と？」

「は。どうもありがとうございます。彼の名は隼と申します。」

「私からも、ライランカの父に問い合わせさせておきましょう。まさかライランカにはいないと思うけれど、
もしかしたらということもありますから。」

そして、亜矢さん、これからは私のことはソフィアと呼んで下さいね。」

「畏まりました・・・ソフィア警視。」

彼女は立ち上がり、深く一礼した。

篤史が思い立って尋ねた。

「ところで、春野君。佐竹織部、或いは梵天という名に聞き覚えはないか？」

「何故その名を?! その者は、津沢衆の長（おさ）の三男です。私ども神部一族の好敵手ですわ。どう
して警察官の貴方がご存じなのです！」

亜矢は、思わず語気を強めた。一般市民が忍びの名などおおよそ知っているはずがない。

「そうか。君とは違う一族だったのか。彼は、私に武術を教えてくれた恩人でね。できれば会いたいと
思っているのだ。だが、紫政帝陛下は教えて下さらない。」

「そうでしたか。しかし、今は誰もそれぞれの居場所を知ることはできません。私ども忍びは、数年前
の解散同化令のあと、それぞれ散っていきました。同じ一族内でも殆どが行き方知れずなのです・・・。」

亜矢は、許嫁を思い出した。

「すまん。辛いことを訊いてしまったようだね。許嫁でさえ行方を探しているのだから、無理だったよ
ね。」

篤史は、はっとして謝った。亜矢は、それと察して話題を変えた。

「良いのです。どうかお気になさらないで下さい。」

しかし、そうだとすると、警視正は忍びの技をご存じなのでしょうね。どうですか、お手合わせをお願い
できますか？」

「いいとも。」

二人は武道場で竹刀を打ち合った。ソフィアは、その立ち合いの迫力に圧倒される。

「なるほど。普通の剣術にはかなり近くしてありますが、忍びの剣ですね。それも津沢衆の。懐かしゅ
うございます。」

亜矢は、息を切らすことなく言った。一方、篤史のほうは精も根も尽き果てている様子だ。

「強いな。紫政帝陛下が推薦されるだけのことはある。期待しているよ。ふう・・・。」

九. 警察官の資質

それからソフィアと篤史は、私服で街中に出て、訓練生候補を探し始めた。

「うわーんっ。」

街角で小さな子が泣いている。

「もうっ、どうして泣くのよ! おかあさん、もう知らないわよ! いつもこうなんだから!」

母親らしい女性は、ガミガミ言うばかりで、それがもう数分も続いている。



ソフィアが見かねて一步踏み出そうとしたとき、それより早く行動を起こした人物がいた。その人影は、ゆっくり女の子に近づいて、目の高さを合わせるようにかがみ込んだ。

「まあまあ、おかあさん。そんなに大きな声ばかりでは、お嬢さんが怖がるばかりですよ。だから泣くんです。・・・お嬢ちゃん、君のママはお嬢ちゃんが嫌いで怒ってるんじゃないんだ。安心して良いんだよ。」

それから、青年は母親にそっと言った。

「お嬢さんをただ抱きしめてあげてください。」

母親が抱きしめると、泣いていた女の子の声が「ひっくひっく」に変わり、やがて静かになった。小さな温もり・・・母親もいつしか泣いていた。

「ごめんね・・・ごめんね。・・・」

彼は静かにその場を離れて、広場の片隅に腰掛けた。周囲には絵筆や絵の具やパレット、近くのイーゼルには白い紙が置いてある。

「あなた、絵描きさん？」

ソフィアが青年に声をかけた。

「はい、そうですが。」

「じゃあ、よかったら私も描いていただけるかしら？」

「もちろんですとも。」

「失礼ですが、ライランカの方ですか？」

彼は鉛筆で輪郭線を描きながら尋ねた。

「ええ、ここへは仕事で来ているの。実は、今日これから髪を切りに行くんです。だから記念にと思って。」

「ライランカの方の髪の色、好きなんですけど難しいんですよね。」

「ありがとうございます。そう、この色がねえ。」

確かに以前からライランカ人の髪の色を普通の絵の具で再現するのは難しいとは聞いていた。

「そういえば、そういうことも聞いていますね。ところで、あなたは学生さん？」

「いえ、もう卒業しました。でも、食べていけなくて。こんなところでアルバイトですよ。」

似顔絵が仕上がった。

「素敵ね。こんなに美人に描いてくれて、どうもありがとう。」

ソフィアは彼に千リンクを渡した。

「えっ、こんなにたくさん・・・。こちらこそ、どうもありがとうございます。」

「ねえ、良かったらなんだけど・・・貴方、警察官になってみない？」

「え、え、なんですか、藪から棒に・・・。」

「実はね、いま警察学校の生徒を集めてるの。さっき女の子とお母さんを助けたでしょ。貴方には警察官の素質があるなって思ったわけ。学校は厳しいけど、お給料も出るし、非番の日もあるから、絵も描



いていけると思うのだけれど、どうかしら？私はソフィア・テジェス。副校長なの。」

「それじゃ、婦警さんなんですか！こりゃあ驚いた！それに、あれ見られてたなんて。」

彼は顔を赤らめた。

「もちろん今すぐには言いません。気が向いたら、十月七日の月曜日、午前十時にアイユーブ警察学校の前まで来てください。ところで、あなたお名前は？」

「僕、藤原景時といます。」

「とても良いお名前ね。それじゃ、待っています。」

ソフィアが去ってしばらくすると、さっきの親子がやって来た。

「先ほどはどうもありがとうございました。私、いつの間にか自分の忙しいことをこの子に押しつけていたような気がします。抱きしめてわかりました。」

「そうですか……。あ、少し待っていて下さいね。……。さあ、できた。」

景時は簡単な花の絵を描いて女の子に手渡した。

「ありがとう。」

女の子は嬉しそうに受け取って、母親に見せた。もう大丈夫だ。

「あ、お代を……。」

「いいえ、これはお嬢さんへのプレゼントです。さっき、多めに払ってくれたお客さんがいましてね。僕としてはこれで埋め合わせになるんですよ。」

「そうですか……。では、お気持ちをありがたく頂戴します。その代わりになるかどうかわかりませんが、これはうちで焼いたパンです。どうぞ召し上がってください。」

「ありがとうございます。では、これはいただきますね。」

彼は小さな紙包みを受け取って、中を覗いた。

「やあ、こりゃあ美味しそうだ。どうもありがとうございます。」

「本当にありがとうございました。」

母親は頭を下げて帰って行った。

「バイバ～イ！」

少し遠くから女の子が手を振った。

僕って今日、良いことをしたのかな……。景時はぼんやり考える。あの綺麗な婦警さんは、僕が女の子とお母さんを助けたと言っていた。確かに見ていられなくて声を掛けたのだけれど。ただ、当たり前のことをしただけなのにな……。

「それは君、その人が言うのが正しいよ。」

アパートの管理人が言った。彼は民間警備会社を定年退職して、管理人になっていた人物である。

「私だって、できれば正式な警察官になりたかったんだ。でもあいにくとその年は希望者が多くてね。それに、君がしたことは、泣いていたその子だけじゃなくて、忙しさに我を忘れていたお母さんのことも救ったことになる。君だって、本当はそれを分かっていたそうじゃないのかね？」

君は、心で人を救えるんだ。そんな君がならなくて、誰が警察官になれると言うんだ。とにかく、やってみろ。」



十. 通り雨

ソフィアは夕飯を食べに商店街へ出かけた。

警察学校の開講までまだしばらくあったが、そういつまでも宮殿のゲストルームに居続けるのも不自然なので、とりあえず週決めの宿に移ったのだ。宿でも朝夕の食事は出してくれるのだが、時折は夕方や宵の街にも出てみなければ、人材は見つけられない。

と、今まで晴れていた空が、一天にわかにかき曇って雨が降り出し、雷鳴が轟いた。

人々は慌てて屋根のある場所に走って行く。ソフィアも駆けだした、そのときだった。一頭の馬が彼女や他の人々のところへ走ってくるのがちらっと見えた。

「あぶないっ！」

黒い影が彼女の腕を強く引き、その勢いで彼女は斜め後方の地面に転がった。というよりも、その何者かがわざと彼女を転がして、馬の進路から外してくれたように思われた。

黒い影はそのまま馬の背に飛び乗ると、どうどうと馬を静めて、人々がいる直前で馬を止まらせた。

一瞬の後、人々の間から拍手が湧き起こった。ソフィアも立ち上がってその人物を見ると、二十代後半くらいの若い女性である。

「助けてくださって、どうもありがとうございました。」

ソフィアは礼を言った。

「いえ、咄嗟のことで……。大変ご無礼申し上げました。どうかお許しください。どこもお怪我はなさってませんか。」

「え？」

ソフィアは一瞬考えた。ご無礼とはどういうことか。もしかしたらこの人は私の素性を知っているのではあるまいか。そして、あの身のこなし、ただ者ではない……。

「あの……私、ソフィア・テジェスと申します。よかったら、お礼にお夕飯ご一緒してくださいませんか。」

相手は少し考え込んだ様子だったが、お断りするのにもまたご無礼だからと承知した。

彼女は和菓子屋でアルバイトをしているということで、ソフィアはその仕事が終わるまで喫茶店で待っていた。

時間通りに彼女はやって来た。半ば息を弾ませている。軽い食事を注文しながら、彼女は席に座った。

「あら、走ってらっしゃったんですか？」

「お待たせしてはと存じまして。」

「あの……あなたは私にとって命の恩人です。それなのにどうしてご無礼という言葉を私にお使いになりますの？」

彼女は「あ」という顔をして、ソフィアを見た。

「やはり思っていることはことは言葉に出てしまうものですね。……実は私は忍びの者で、名を桔梗と申します。私どもは高貴な方々のご尊顔をすべて存じ上げております。姫様のことも、しばらく前から気が付き、それとなく拝見しておりましたところ、先ほどのことが起こりました。」



「そうでしたか。やはり私のことをご存知だったのですね。改めてお礼を言います。」

「勿体のうございます。それに、どうかそのような丁寧語はおやめくださいますよう。・・・それから、先ほどの馬は、雷鳴に驚いて暴走したのだそうです。あとから馬車屋が商店街を謝って回っておりました。」

「なるほど、あの馬はそれで・・・。何にしても、被害がなくてよかった。あなたのおかげです。ところで、あれは合気道？」

「はい。左様でございます。」

良い腕前をしている。もしかしたら、この人も良い警察官になるかもしれない。

「解散令のことは知っています。貴女も町に出て来たのですね。」

「はい。数年前の解散令で、忍びの者たちはすべての立場を解かれ、一般市民となりました。私も、今井はるかという名前になりましたが、先祖たる忍びたちが行ってきた殺戮の歴史の償いに、今度は人を救っていきたいと思っています。だからお金を貯めて、薬科大学に入ろうかと。」

「そうですか。でも、もしお金を貯めなくても人を救える職業になれるとしたら、他の職業でも構わない？」

「え？」

「実は、私が今ここにいるのは、最高の警察学校の指導官や訓練生を見つけるめなの。そこでは、実技訓練に忍びの技も教える予定で、貴女は講師兼訓練生として適任だと思うのです。」

でも、そうはいつでも、あなたたちならすぐに察しがついてしまうかもしれないわね。私にはもうひとつ別の目的があります。私は短期間で自分の後継者を育てなければなりません。あくまでも秘密裏にね。」

「そうだったのですか。」

はるかも、ライランカのファイーナ皇女が余命宣告を受けていることは耳にしていた。つまり皇女が言う『後継者』とは、ライランカの次期皇帝のことなのだ。

「警察官も人を救える職業よ。それに、さっきの合気道も含めて、あなたの技は薬剤師で埋もれさせて良いものではないと思うの。どうかしら？あ、これはあくまでも提案です。もしよかったら、十月七日の朝十時にアイユーブ警察学校の前に来てください。」

「わかりました。考えさせていただきます。」

食事を終えて、帰り際にソフィアはふと思い出して言った。

「そうそう、忍びだった人がもう一人いるの。正式な名前はもう一般市民だけど、たしか昔は楓とか。」

はるかの顔色が変わった。

「楓が・・・。楓に会えるのか・・・。」

あれはもう十年近く前になる。

ある日、はるか達が住む忍びの里全域に皇帝から集合命令がかかった。

「皆の者、これからわしの言うことをよく聞いて欲しい。・・・今日ただ今より皆の『忍び』の身分をすべて解き、改めて戸籍を作成して一般市民とする。その上で、各々好きな職業に就いて欲しい。」

先祖代々、これまでの務めはさぞ辛かったことであろう。皇帝として、為政者として、今日までそな



たたちをその苦しみから解放することができなかったこと、心から詫びる。」

紫政帝は数分間にわたって深く頭を下げた。人々の間にどよめきが起こった。

桔梗も、幼なじみの楓と顔を見合わせた。本当に・・・？しかし、皇帝自らがあのように深々と頭を下げている。嘘偽りではあるまい。

その数日後、いくつかあった村は解体され、人々も思い思いに散っていった。あの日から桔梗と楓はお互いに居場所がわからなくなったままなのだ。

一一. 手のひら

その日、ソフィアと篤史は、アイユーブ警察学校の正門前にいた。

開講まであと半月の今日から、二人はここに住み込んで、篤史と入れ替わりになる校長や、事務方をはじめとする職員たちと打ち合わせや仕事の引き継ぎを行うのである。

校長はルカイル・アフマド・ハッサンという、当地出身の女性警視正である。少し日に焼けた、小柄で少しだけふくよかな容姿は、会う者に安心感を抱かせる。

そもそもアイユーブ警察学校があのような計画の場になったのは、七〇歳になる彼女が体力の衰えを理由に退官を願い出たタイミングと計画開始とがたまたま一致したからなのだが、その瞳はまだ輝きを湛えていた。

「加賀警視正、お久しぶりです。こちらは副校長になられる・・・？」

「ご無沙汰しておりました、ルカイル警視正。こちらはソフィア・テジェス警視。」

「ソフィア・テジェスです。」

「ライランカの方ね。よろしく。お二人がいらっしゃる頃を見計らって、みんなに集まってもらってます。講堂のほうへどうぞ。」

ルカイルは手を差し出した。七〇歳になる彼女の手は柔らかく温かかった。そして何故か一点の光のようなものが感じられるのだった。

ソフィアはふと亡き母を思った。母上も温かい手をしていただけ・・・。

ソフィア——ファイーナ皇女——の母・カナリア妃は、小柄で細い体つきをしていたが、誰の子でもまるで自分の子のように親しく話しかけたり叱ったりしたので、宮殿職員からも一般市民からも慕われていた。

その母は、ファイーナが十歳の時に心臓発作で突然この世を去った。葬儀の日、父は冷たくなった妻と泣きじゃくる娘を抱きしめて泣いた。

「カナリア、お別れになるんだね。・・・人の命は本当に儂いものだ。少しでも何かバランスが崩れると死んでしまう・・・。だが、その儂さの故に人は誰もが美しく、尊い。ファイーナ、おまえの母も優しい人だった、美しかった、そのことは決して忘れるな。」

ルカイル、篤史、ソフィアの順に講堂に入ると、多くの視線とかすかなざわめきを感じられた。

「みんな、こちらが後任の加賀警視正とソフィア警視です。私と同様にどうか助けてあげてくださいね。加賀警視正とは旧知の間柄だけれど、公明正大で優しい方よ。それでは加賀警視正、どうぞ。」



篤史が進み出た。

「初めまして、職員の諸君。加賀篤史と言います。今回、縁があってこの学校の校長を務めることになりました。これまでもそうであったように、これからも警察官の役割は大きくなっていくでしょう。だからこの学校を、その礎を築く存在にしていきたいと思います。そしてそのためには皆さんの力が必要なのです。どうかよろしく願いいたします。」

続いてソフィアが紹介された。

「皆さん、こんにちは。ソフィア・テジェスです。私は、ご覧の通りライランカから来た者で、もともとは法律家です。同じ法を守る者として共通するところは多いと思いますが、警察官としての実務は経験していません。この学校でいろいろ学ばせていただければと思います。」

それから、ルカイルは校内を案内してくれた。校長室、会議室、経理課、調理場と食堂、教室、武道の稽古場、男子寮と女子寮など、いずれも掃除と整理整頓がよく行き届いている。

「生活の乱れは心の乱れです。心が乱れると事故やミスが起こりやすくなります。私は長年そういう指導をしてきました。お二方にもそれはぜひ受け継いでほしいと思います。幸いにして、この地域には一日三回の礼拝が根付いています。礼拝は神との対話をするだけではなく、心の時間を取り戻してくれるものですから。」

「たしかにそうですね。ルカイル警視正のお考えに賛同します。」篤史が応えた。

ルカイル警視正はこれまで温かい包容力と厳しさの両輪でこの学校を率いてきたのだ、とソフィアは思った。

気がつくと、警察学校の空に夕焼けが広がっていた。

一二. 希望

ソフィアが新しく設けられた副校長室で資料を並べていると、事務係のアブドフがドアをノックして入ってきた。

「ソフィア警視、ご面会の方がいらっしゃってます。今井はるかさんという方です。」

「あ、彼女ね。わかりました。お通ししてください。」

総招集の日まではまだ日があるが、講師を引き受けてくれるのだろうか、それとも断られるのだろうか。

「姫様にはご機嫌麗しゅう存じます。」

はるかはまず跪いて礼をした。

「はるかさん、来てくださったのは嬉しいけど、ここでは私は王族ではありません。どうぞ普通になさって。ソフィア警視と呼んでください。」

ソフィアは親しげに微笑んだ。

(ああ、この方も女将さんみたいにお優しいんだ。)

はるかは思った。それまで務めていた和菓子屋の女将もよくしてくれたが、彼女の微笑みと同じなのだ。



和菓子屋に入るとき、はるかは自分が忍びの者で解放されて街に出てきたことを和菓子屋夫婦に伝えた。こんな私でいいのでしょうかと。

大将は言った。

「これまではこれまで、本当に大切なのは、これからさ。それにあんたは綺麗な目をしている。惚れそうなくらいな。」

「あんた！」女将がたしなめた。

「あ、いやいや、手を出すとかそんなんじゃないよ。ただ、この人にはハキハキしたものをを感じるんだよ。」

「それはあたしも思うね。人助けしたいって人だもの。数年でもいい、あたしたちも雇ってあげようじゃないか。それにこの人はきっと何でもできるよ。」

それから数年、はるかは夫婦が見込んだとおりに何でも器用にこなした。接客、材料や商品の運搬、掃除、テキパキと動くその姿は店に清々しい風を吹かせ続けた。

あの日、警察学校のことを女将に話すと、そりゃぜひお引き受けしなさいよ、あんたを失うのは嫌だけど、うちはまたなんとかするから。と言ってくれた。

「さっきからみんな、あんたが暴れ馬を静めたって話で持ちきりだよ。和菓子屋に置いてくにゃ惜しいってさ。ああ、あんたが制服着た姿を想像すると、なんだかわくわくするねえ。卒業したら、一度は凜とした制服姿を見せに来ておくれよ。」

「はい、ぜひ。」

女将はしばらく彼女を抱きしめていたが、やがて名残惜しそうに手を離れた。

「それでは、ソフィア警視とお呼びいたします。講師のお話、お引き受けします。和菓子屋は快く承諾してくれましたゆえ。」

「ありがとうございます。よろしくお願いします。そうそう、楓さん・・・今は春野亜矢さんというのだけれど、貴女のことを話したら、なんと幼なじみだというじゃないの。もちろん今すぐにでも会いたいわよね。」

「はい。」

「それでは行きましょう。」

二人は女子寮のある部屋の前まで来た。

「それじゃ、私はここまで。あなたのお部屋は右の五号室にしましょう。夕食は六時半、あとは亜矢さんから聞いて。」

「どうもありがとうございます。」

はるかはドアをノックした。はい、という声が聞こえた。聞き覚えのある、懐かしい声に違いなかった。

扉が開いて、ショートカットの女性が立っていた。

「楓・・・か・・・？」

「桔梗？桔梗だよな？」

二人はしばらく立ちすくんだ後、どちらからともなく抱き合った。生きて会えるなんて・・・二人ともそう思っていることは互いにわかる。



「私はあれからあちこちで働いて、お金を貯めて薬科大に入ろうとしていたんだ。それが先祖代々の罪滅ぼしだと思ってね。でも、ソフィア警視と出会って、ここに来た。」

「そうだったのか。私は人探しをするために戸籍係になった。役所で事情を説明したら、それが紫政帝陛下のお耳に入ったとかで戸籍係に採用して下さったんだ。」

「人探し？誰を探しているんだ？」

「隼を覚えているか？」

「隼……。覚えているぞ。そうか、そうだったのか。しかし何故離れ離れになったのだ。」

「解散令が出ることはあの日まで長老たちにしか知らされていなかった。隼は、そのときたまたまどこかに諜報活動に行っていたのだ。己が使命は親兄弟にも漏らすなかれ……。ましてや許嫁にもな。

村長（むらおさ）は、彼も呼び返そうとしてくれたらしいのだが、その時にはすでに連絡が取れなくなっていた。」

「……。そうだったのか……。」

自分は人を恋したことはないが、この友の心中を推し量ることはできる。

「そして、数ヶ月前、陛下からこう言われた。こんなに長い時間をかけても手がかりが掴めないということは、もしかしたらほかの大陸にいるのかもしれない。もはやこちらから探しに出向くしかあるまい。今度、従来の型を逸脱するような警察学校のカリキュラムを創る。警察官の殉職を減らすためだ。そこで警察官になって、海洋警察官として探して回る気はないか。もちろんそのあいだも戸籍係には言い置いておくが、と。」

「なるほど、海洋警察なら世界を回れるな。」

「それにしても、ここでおぬしに会えるとは思わなかったぞ。しかも、ファイーナ様がソフィア警視と名乗っておられるのだからな。驚くことが多い。」

「姫様は、短期間で後継者を育てるとおっしゃった。紫政帝陛下にしても、殉職する警察官を減らしたいというご意向がある。一石二鳥ということだ。それに加えて、おぬしの幸せか。ここには一体いくつの希望や目的が込められているのだろうか。」

一三. 天才科学者と弟子

「いやー、まだ暑いですな。」

そう言いながら杖をついて食堂に入ってきたのは、周公沢である。紫政帝が紹介してくれた講師の一人だ。ただ、彼だけは実験時の事故の後遺症で足が少し不自由なため、訓練生という立場をとらず、科学を教えるのみということになっている。そして傍らには弟子の呉章英が付き添っている。公沢の身の回りの世話をしつつ、科学者の道を歩んでいる青年である。

「こんにちは、博士、呉君。」

篤史は彼を『博士』と呼ぶことにした。公沢も、そのほうがよいだろうと同意している。

「何せ、もう年ですわ。今さら猛訓練なんかできしまへん。」

「しかし、警察学校へは協力してくださる。」

篤史は冗談めかして言った。

「そら大恩ある皇帝はんのご依頼とあらば断れまへんやんか。それに、たまには外の空気を吸うのも悪くはおへんから。」



彼は弟子のほうをチラリと見て言った。

篤史も公沢の意を察した。

「ときに、呉君は・・・やっぱり夢は科学省かね。まあ、博士のこともあるからそのままでも構わないが。」

「はい、申し訳ありません。僕は科学者になりたいんです。」

「うん。無理強いはいしないよ。ただ、科学だけじゃなくて、他の世界も見ておいたほうが、科学の世界の深層までいけるかもしれない、ということだ。君は、ただ我々を観察していればいい。」

青年は頷いた。

二人がこの国に帰化したのは八年前のことだ。

基幹産業である農業の生産効率を上げるため、紫政帝はトラクターのための高機能モーターの開発を指示した。そのために招かれたのが公沢だったが、そのあいだに政治家だった叔父が失脚。比較的裕福だった彼の一族は一転して離散した。公沢も故国に帰れば何が起こるかわからない身の上になってしまったのである。

紫政帝は、彼らの身を案じて帰化を勧めた。

「ここに籍を置けば、誰も君たちを狙う必要がなくなるが、どうだろうか。それに、どのみち、ものの開発には終わりが無い。ここにずっと留まることになるのだろうか。」

「そうですねあ・・・。ここに来るときも、ある程度の覚悟はしてきたはずなのに・・・。なんや愛おしい言うんか、未練みたいなものがありましてなあ。でも、この子ももしかしたら巻き込まれるかわからんし・・・。仕方あらへん。お世話になりまひよか。よろしゅうお願い致します。」

「僕のことはええんです、博士。」章英が言った。

幼いときに両親と死に別れた彼は、親戚の家や施設を転々としながら成長した。人間というものにほとんど嫌気がさし、無機質で純粋な科学の世界にのめり込んでいった。

公沢は、科学の純粋さに惹かれるという彼に、若い頃の自分を重ね見て、正式なアシスタントとして連れて歩くようになった。章英も公沢のずば抜けた科学的才能と大らかな人柄ゆえに、次第に打ち解けていった。今では心から信頼し、尊敬しきっている。（どこまでもこの博士について行きたい・・・）そう思っていた。

「おまはん、わしが死んだらどうするんや。」公沢も一度そう言ったことがある。

「わしにずーっとついてきてくれとるんは、ほんま嬉しい。けどなあ、歳から言うてわしのほうが先に逝くでえ。おまはんはおまはんや。ちゃんと自分の進むとこ、みつけなあかん。」

どこからか、竹同士が激しくぶつかる音が聞こえてきた。

「なんや、すごい音しよるな。行ってみまひよか。」

公沢に続いて章英と篤史が音のするほうへ行ってみると、武道場で二人の女性が竹刀でやり合っていた。

「腕はなまってないな、桔梗。」

「ああ、おぬしもな。嬉しいぞ。」

あとから入ってきた三人は、立ち合いの激しさ速さ、気合にたちまち圧倒された。人が入ってきたの



で、二人は竹刀を納めて向かい合って一礼し、近づいてきた。

「春野君だったか。すごい音がしてたぞ。」篤史が声をかけた。

「あ、加賀警視正。それに博士と章英さんまで……。響いておりましたか。申し訳ございません。こちら、同じく忍びの者で、今井はるかと申します。久しぶりゆえ、手合わせをしておりました。」

亜矢がはるかを紹介した。

「ききょ……。ではなかった、はるか、こちら、校長の加賀篤史警視正。と、科学者の周公沢博士とアシスタントの呉章英さん。」

「初めまして。今井はるかです。どうかよろしく願いいたします。」

「君が今井君か。ソフィア警視から話は聞いてるよ。来てくれるのかな。」

「はい。お引き受けする旨、先程ソフィア警視にお伝えしたところです。」

「それはよかった。君のことも楽しみにしてるよ。よろしく頼む。」

「はい。」

(女の人やのに、あんなにすごい戦い方するんか。)

章英は呆然と立ち尽くしていた。いや、武道の立ち会いそのものを見るのも初めてだった。彼が育った国では、スポーツはあまり盛んではなかったし、彼自身も学校の部活動になど全く興味がなかったからだ。

たしかに違う世界、彼の知らない世界がそこにはあった。

一四. 入学式

惑星ルシアでは、一年は一二月、ひと月は四八日と決められている。これはルシアの公転と、アルム、イスカという二つの衛星がルシアの軌道上で交わる周期とによる。

太陽暦六四年十月七日の朝十時、アイユーブ警察学校の校門が開いた。なお、入り口には立て看板があり、こう書かれていた。

「太陽暦六四年度 アイユーブ警察学校 入学式

最高レベルの警察官訓練生求む 脱落も覚悟の上で校門をくぐられたし」

チャイムが鳴った。中から一人の男性が現れて、ややゆっくりしたテンポでこう言った。

「お集まりの方々、ようこそアイユーブ警察学校へ。私は校長を務める加賀篤史と申します。看板はもうご覧になったかと思いますが、それだけでなくとも警察官の訓練は厳しいことで知られていますが、これからここで行われる訓練は、有能な講師たち自身も自分の専門科目以外は訓練生となり、切磋琢磨して、より高度な知識や技能を作り上げようとする新たな試みを目指します。よって、入学一年で巡査の資格を取れていなければ退学とさせていただきます。それくらいの覚悟を諸君に求めます。……」

会場にどよめきが起こった。どれほど高度で過酷な訓練になるのだろうか……。

「しかし、それを見事に成し遂げたとき、そこには最強の警察官たちがいてくれると、私たちは信じています。その日を目指してください。以上です。」

集まっていた人々のおおよそはその話の内容に驚いて去ったが、二〇人ほどの人々が門をくぐった。

ジェシカ・ティスードと神崎リュウは、普通の警察学校に入るつもりでここに来たが、別段おじけづ



くこともなく校内に入っていったこの二〇人に含まれていた。

「どんなに厳しくても、私は父さんの後を継ぐんだ」

ジェシカはそんな思いでいた。

「警察官は厳しくて当たり前なんだ。そうでなければ人の命を守れやしない。」

リュウはこの仕事に就くことを決めたときから覚悟していた。

そんな二人が隣り合わせになって着席したのは、本当の偶然だ。

「失礼ですけれど、あなたの髪の色、とても綺麗ですね。」

話しかけたのは、ジェシカからだった。

「え、あ、はい。ありがとうございます。僕はオルニアとライランカのハーフなんです。小さいときはこの緑色のせいでよくいじめられて本当に嫌でした。褒めてくれたのは両親や学校の先生達くらいなものですよ。」

「あら、こんなに綺麗なのにね。・・・ 私はジェシカ・ティスードといいます。父も警察官でした。」

「神崎リュウです。そうですか。実は僕も両親とも警察官で。」

「なんだか気が合いそうですね。よろしくお願いします。」

「こちらこそ。」

程なくして、先ほどの男性が壇上に上がった。ゆっくりと全員を見渡してから、話し始める。

「先ほどは野外にて失礼しました。校長の加賀篤史です。こうしてこの学校の門をくぐられてきたからには、皆それぞれに警察官になりたいという強い思いや覚悟がおありの方々ばかりなのでありましょう。一人でも多くの方が立派な警察官となられるよう、講師一同、心を込めてご指導いたす所存であります。何か悩み事や辛いことがあった場合は、誰でもいい、遠慮なく話してください。訓練は厳しくとも 私を始めこの学校にいる人たちはみんなが志を同じくして集った同志、仲間、家族です。決して一人ではない、それだけは忘れないでください。」

ジェシカはその時、篤史の瞳に温もりを感じていた。他の幾人かも同じだった。

だが、次に進み出てきた人物を見て、少し驚いた。

「あら、あの方は・・・。」

リュウも思わず呟いた。

「あれは・・・ライランカの・・・。」

リュウの髪とは違う、紺碧の海の色をした髪。純粹のライランカ人のようだった。

「皆さん、初めまして。副校長のソフィア・テジェスです。これから皆さんを男子寮と女子寮それぞれにご案内いたします。今日は荷物を置いて、夕食までゆっくりしておいてください。明日からは規律正しい生活になりますから。」

各々が部屋に入るとき、ソフィアは生活の規則を書いたプリントを手渡しした。起床時間や訓練内容やスケジュール、週末は自由時間があり、アイユーブ市内であれば外出も許可されることなどだ。

やがて、リュウの番が来た。

「はい、あなたも。・・・あら？その髪は？」



「僕は、母がライランカ人なんです。母はタカユヤ州の出身ですが、今はオルニアで警察官をしています。」

「ああ、そうなんです。わかりました。よろしくお願ひします。期待していますよ。」

「どうかよろしくお願ひいたします。」

そのあとから、見覚えのある顔が見えた。

「あら、あなたは。来て下さったのね。」

「はい、とても厳しいみたいで、果たして僕がなれるかどうか分かりませんが。」

それは、広場で似顔絵描きをしていた藤原景時だった。

「大丈夫。あなたならきつとなれるわ。」

「ありがとうございます。頑張ります。」

最後にジェシカが女子寮の部屋に案内されたときには、ソフィアは少し疲れた様子だった。無理もない、二十人ほどの人々を相手に、ひとりひとり話しかけながらプリントを渡してきたのだ。

「失礼ですけれど、お疲れなのでは・・・。」

「ありがとうございます。正直疲れました。でも、生徒さんを少しでも知っておきたくて。それも務めですから。」

「ご自分にお厳しいのですね。私の父も警察官でしたから、警察学校の内容は聞いていました。でも、ここはきつともっと厳しいのでしょうか。あなたのもとで行われる訓練、楽しみになりました。」

「お父様は今？」

「亡くなりました。癌でした。」

「そう・・・。聞いてはいけないことを聞いてしまいましたね。ごめんなさい。」

「いいえ、いずれはお耳に入ることですから。どうかお気になさらないでください。そして・・・どうかお休みください。あとは自分でやります。」

「ありがとう。それじゃ、お休みなさい。」

彼女の観察眼はなかなかかもしれない、とソフィアは思った。常にすべてのものを観察する力、それは人として大切なことのひとつなのだ。

一五. 環境設計学

講義は、篤史による「環境設計学」で始まった。

「諸君は、何故警察学校で環境設計学を学ぶのか、不思議に思っているでしょう。でも、それには理由があるのです。」

篤史は、こう切り出した。以下、彼の講義内容である。

警察官は普段、治安維持や市民の安全確保の為に活動する。

そのとき、自分が活動している土地の特徴、すなわち地の利を熟知していたほうが仕事は格段にやりやすくなる。また、大規模災害の際には、人々を安全な場所まで誘導することも任務となる。例えば、地震が起こったとき、津波を想定して、できるだけ高台へと人々を誘導すること、これを瞬時に判断し



なければならない。それが、環境設計学を学ぶことの意義である。

また、他の業務においても、その意義は同じで、必要不可欠なものだから、一人でも多くの人に知っておいていただきたい。

この世に「絶対」はない。

形あるものも、目に見えないものも、時を経ればいつかその形を変える。

絶対に安全と謳って作られた防波堤であろうとも、やがては朽ち果て、建て直すか波に壊されるかのどちらかになる運命だ。

決して「自然」を甘く見てはいけない。どんな大きな船もひっくり返し、山崩れは村や町をいとも簡単に呑み込む。そのとき、我々は為す術もなく自然の営みの大きさを目の当たりにするのである。

しかし、そうした中で人は団結し、助け合い、知恵を駆使して、共に生きていく。「人」とは、それができる生き物なのである。たとえ家族や友人、親しい人々と別れてしまったとしても、「思い出」として胸にとどめておくこともできる。それが人間の素晴らしさではないだろうか。

実例で、こんな話がある。

海辺にほど近いところに、小さな村があった。

山の中ほどに「これより下に人住むべからず」という碑が建っており、人々は理由を分からないまま、その通りにして、その碑から下には田畑しか作らなかった。

あるとき、大きな地震が村の一角を襲った。周辺の村々は津波に吞まれて、多くの犠牲者が出たが、石碑の村の人々は全員が生き残った、とのことだ。

石碑を建てたのは、村の遠い祖先だったと思われるが、このようなことが環境設計学を学ぶということである。

自然と共存しながら、または地の利を活かしながら、人々と親しく共に生きていく・・・それを「幸せ」と呼ぶのではないだろうか。

しかるに、そのような、愛すべき人々を守ることこそが、我々警察官の使命である。

一六. 剣の道

一二時になると、地元出身者はシャイナニ教の礼拝室で祈りを捧げ、その後にほかの訓練生たちと食事をとった。午後からは体育系の訓練を受けるため、やや軽めにしておくようには指定されていたが。

現在の惑星ルシアでは剣士の資格が統一され、一級から五級までおのおの白・紫・青・赤・緑とサーベルの柄の色が決められている。オルニアだけは独自に発展した一枚刃による剣道があったが、それもサーベルと同等の等級が割り振られた。セルジオ・カルルは白い柄のサーベルを腰に差し、滝田光昭もオルニア剣道ながら白い柄の刀を帯びている。

光昭はオルニア警察きっての剣豪の一人である。彼はまず訓練生全員に念入りなストレッチと一里の走り込みを課した。



「中には走り慣れている者もいると思うが、オルニア剣道の基本は足腰なので、走り込みは毎日欠かさずおこなってもらいます。たかだか一里と侮るなかれ。雨の日も風の日も走ります。宜しいですな。では、私についてきてください。」

光昭の後を、セルジオ・カルルが、今井はるかと春野亜矢が続いた。ジェシカ・ティスードと神崎リュウ、ほかの訓練生たちも警察官になる日のためにある程度の体力は蓄えてきたとみえ、遅れずについて行く。

ある意味では、藤原景時だけが走り込みに慣れていない例外といえよう。コース半ばから息をぜいぜい言わせている。

「どうやら君は教え甲斐がありそうだね。」

光昭が声をかける。

「申し訳ありません。僕はずっと絵ばかり描いてきたもので。」

「ほう、そういえば今回の訓練生のなかには美大卒がいるとのことだったが、君がそうか。なに、心配することはないよ。僕たちが一人前に育ててあげるから。」

そう言って彼の肩を軽くたたいた。

彼は一からのスタートだからまだよい・・・光昭は元くノ一の二人のことを気にかけていた。彼女たちが幼い頃から身につけてきたのは殺戮の剣。それを警察官の剣術に矯正しなければならない。

いや矯正というのは違うな・・・彼女たちに一旦完全な警官の剣道を覚えてもらってから、今度は僕自身が忍びの技を習得して、新しい技、新しい身のこなし方を作り出すことになる。いわば全ての者たちが何らかの変化をしていくのだ。

ルシャナの「星法の書」にもこうある・・・

教える者、施す者は、実は自らもまた教えられ、施される者でもある。全ての者が互いに他の全てから影響を受けて変わっていく。人はそれぞれの瞬間に出会い、やがて散っていくもの。そのあとにはその人と出会ったという記憶と、ふれあったことによる影響、変化が残るのだ。

・・・と。

それから模範演技として、光昭とサーベルの剣士・セルジオの竹刀による他流試合が行われた。流派は違えど、剣の道は同じである。剣豪同士の立ち会いのスピードと正確さ、安定感が見る者を圧倒する。

「では、これから基本の打ち込みの練習をしばらくは続けてもらいます。その後に二人一組になったの練習に切り替えるから油断なきよう。特に腰の動きを見ていきます。」

各自が見よう見まねで竹刀を上から下へ打ち下ろしている中を光昭が回り、「これはここをこうして。」という具合に指導していった。

元くノ一の二人、はるかと亜矢は模範的な素振りをしている。どうやら僕の考えは間違っていたようだ、と彼は思った。忍びたちは剣道の基本を身に付けていて、それに忍び独自の技を臨機応変に繰り出すからこそ、名だたる剣士たちが忍びに勝てなかったのではないだろうか・・・。

「それでは本日はここまで。みんなほぼ動きはいい。始めにしてはよくできたと褒めておきますが、実戦にはまだまだほど遠い。精進して下さい。」

彼がこう言って講義を終わらせたときには、ほとんどの者が汗をかき、息を切らせていた。



やがて武道場から人がいなくなった頃、セルジオ警部が近づいてきた。

「やはりみんな他流試合は初めて見たようですね。たとえ見たことがあったとしても、白い柄の剣士は限られている。私にとっても貴方ほどの強敵は初めて。よい機会をいただいた。」

「こちらこそ。サーベルの講義の時はどうぞお手柔らかに。・・・ところで、加賀警視正とソフィア警視のお姿がなかったようですが？」

「加賀警視正は校長として事務方のお仕事もおありでしょう。そして、これは貴方が異動してくる少し前に講師一同が加賀警視正から伺ったことですが、ソフィア警視にはドクターストップがかかっているそうなのです。だから体育系の訓練はできない。どうやらどこかご病気の様ですね。」

「そうだったのですか。」

「警視ご自身は、訓練にも参加されたいようなことはおっしゃっていましたよ。悔しいけれど、現実にはもう勝てないと。」

一七. 使命

一ヵ月後、午前の講義は環境設計学から法律学へと切り替わった。講義期間は三ヵ月。憲法から始まって国際法、刑法と、徐々に細かな項目になっていく。

「為政者が守るべき法が憲法です。みなさんも知っているように、平和を維持し、どの国の市民に生まれても平等に安全に幸せに暮らせるように取り計らうために皇帝が置かれているのですが、その皇帝が万が一にも憲法を変えて国を私物化するようなことがあれば、市民はそれを阻止しなければなりません。それは市民の権利であり、義務でもあります。」

そう語るソフィアが自ら異国の地に後継者を求めて来たのも、実はこのためだった。

自国の国民は全員が彼女のことを知っている。みんなが表の顔しか見せていない可能性だってある。であれば、顔が知られていない異国から後継を探したほうが良いのではないかというのが、彼女と父・アルティオ帝が導き出した結論だったのだ。

宮廷医務官の一人で内科医のナディア・サディラは、皇女の体調を案じて渡航に反対したが、その決意を知るとオルニアの医師に紹介状を書いてくれた。

「もうお引き止めすることは叶いますまいが、どうかくれぐれもお身体にさわるようなことはなさいませぬよう。当地の山形かなみ医師は私が知る中でもトップクラスの医師です。必ずお訪ね下さい。」

「わかりました。ご心配かけてごめんなさい。必ず山形医師にお会いします。」

山形医師が勤める朝川総合病院は、宮殿のある首都・湯井岡市の隣、朝川市の中心部にある。オルニアに着いて一週間後、水曜日午後の総合病院にソフィアの姿があった。

「こんにちは。初めてお目にかかります。担当の山形です。サディラ医師からお話は承っております。ソフィア様、でしたね。」

かなみは軽く会釈しながら言った。歳を重ねて幾分かふくよかになりかけている、そんな印象だった。

「はい、どうかよろしく申し上げます。」

グナンリラ病は、十万人に一人という稀な発生率で現れる病気である。

症例が極めて少なく、治療法もまだわかっていないが、発症すると心臓の動きが徐々に遅くなり、や



がて停止してしまう不治の病とされている。

「幸い、現在はさほど心配のない段階のようです。サディラ医師と同じ処方をしておきますが、二週間に一度は、必ず来て下さい。」

かなみにとっても、この病と向き合うのは初めてのことであった。患者が誰かということよりも、この稀な症例を如何に悪化させずに持たせるか、そのことに真剣になるべきだと彼女は考えていた。

少しでも多くの患者と、多くの症例と向き合って、研究を進め、さらに多くの患者を助ける。それが医師の務めだ。

それ以来、ソフィアは隔週水曜日の午後、欠かさず通院している。副校長としての仕事は他の時間内に全て終わらせ、体育系の訓練の時間内には帰る、そんな形だった。

(もし健康体のままだったら、みんなと一緒に汗をかけるのになあ……。)

幾度そう思ったことか。だが同時に思うことがある。病にならないでいたら、自分は国を出ることもなく、今は共に暮らしている人々と会うこともなかったであろう。もしかしたら将来生きる人々ために、自分はそういう経験をできるように位置付けられたのかもしれない……。

一八. 似顔絵

警察学校はひと冬を越した。訓練生たちも毎日の走り込みや受講でだいぶたくましく精悍な顔つきに変わってきたように思える。

ソフィアの法学講義は厳しく、毎週末の復習テストで成績が悪かった者は、日曜日に補習を受けた。そういった努力が実り、法学の講義が終わる頃には、法学の知識での脱落者は一人もいなかった。

「ソフィア、お疲れ様。」

法学の最後の講義が終わった日の夕方、篤史が言った。

「みんな良い顔になった。精悍な雰囲気が出たように見えるよ。」

「そうですね。私の法学は終わりました。あとは、他の講師の方にお任せします。それに、みんなの警察官としての自覚がどこまで芽生えるかというところもありますね。」

「確かに。」

彼はふと息をついた。彼は男子寮を、彼女は女子寮を抜き打ちで見回っている。大方の講習生たちはきちんと整理整頓が出来ているのだが、卒業までは決して気を抜けない。この間も、景時が画材を洗い場に出しっ放していたのを注意したばかりだ。

「画材を持ち込んでいても構わないが、出しっ放しはいけないな。君がいないあいだに、誰かが怪我をして傷口を洗い流しに来たらどうするんだ。邪魔になるだろ。洗い場だけではない。すべてのものがあるべき場所にあるべき姿でなければ、誰かが困るのだ。」

そして、完璧に近い形でそこにあることこそが美しいということなのではないだろうか。君は恐らくずっとキャンパス上で美を追い求めてきたものと思う。これからは、世界全体にあるべき姿、美しい姿に保っていくんだ。それが我々警察官の仕事なんだよ。」

「申し訳ありません。考えが到りませんでした。」

「以後、気をつけるように。」

「は。」



注意し終わってから、篤史は思った。

(あれ？僕は父上と同じことを言った。・・・)

「そういえば、君は絵描きだったね。ひとつ頼まれてくれないか？」

「はい。何でしょう？」

「実は、春野君には生き別れになっている許嫁がいてね。その人の似顔絵が欲しいんだ。」

「分かりました。やってみましょう。まずは亜矢さんから特徴を訊かないと。」

「ありがとう。それじゃ、土曜日の午後に第二会議室に来てくれ。」

土曜日・・・景時が指定の部屋に入ると、そこにはすでに篤史とソフィアが待っていた。

「どうもありがとう。お話は加賀警視正から伺ったわ。亜矢さんも、すぐに来るはずだから。」

ソフィアが言った。

「それにしても驚いたよ。これが君が描いた絵なんだって？まさしくソフィア警視にそっくりだ。よく出来ている。」

篤史が見ているのは、景時がソフィアと出会った時に描いた似顔絵である。

「あのときの絵ですね！まだ持っていて下さったんですか？」

「当たり前じゃない。記念だと言ったでしょ。」

ソフィアは微笑んだ。その時、亜矢が入って来た。

「お待たせしまして。」

「まだ約束の時間ではないが、君が最後とは珍しいね。何かあったのかな？」

篤史が尋ねた。

「いえ。ただアウロラが愚図っただけです。」

アウロラというのは、警察学校で飼育している犬の名である。訓練生たちが毎日交代で散歩させているのだ。

「そうか。それじゃ始めてもらおうか。藤原君、あとは頼んだよ。」

篤史とソフィアは、そのまま部屋を出た。

「それでは亜矢さん、顔の輪郭から伺いますよ。だいたい幾つくらいの方ですか？髪型は？」

景時が訊く、亜矢が答える・・・その繰り返しは二時間くらい続いた。

「ありがとう、画伯。とてもよく似ているわ。・・・とっても・・・。」

気丈なはずの亜矢が涙ぐんでいる。

「愛しておられるのですね・・・。この方を・・・。」

景時は察した。

「ええ、とっても！」

亜矢は、はっきりと言った。

「僕もお手伝いします！同じ絵を何枚でも描きます！みんなに配りましょう！」

「ありがとう・・・。」

亜矢は、景時の手を両手で握った。

訓練生だけではなく、事務員や地元商店街の掲示板まで、五十枚もの似顔絵が描きあがるまでには半月を要したが、景時はやり抜いた。毎朝早く起きて、だいたい五枚ずつ描いたのだ。



勿論垂矢からは、何度もお礼を言われた。

「よくやってくれたね。」

篤史からもソフィアからも褒められた。

「いえ。幾つ描いても、結果が出なければ。みんながそれぞれの赴任地で貼り出してくれるとか。」

景時は言った。だが、篤史や光昭は彼を見直した。自分以外の誰かのために、寝る間も惜しんで半月も同じ絵を描き続けた、心優しく強い男がここにいたのだ。

一九. 暁の食堂

「実は、今度の日曜日、紫政帝陛下から昼食会に参加していただきたいとのことなのだが。」

周りに誰もいないことを確かめて彼は言った。

ソフィアは少し考えてからご招待をお受けしますと返事をした。そういえば紫政帝陛下とはしばらくお会いしていない。陛下も警察学校の様子や、あるいは自分の病状のことを心配して下さっているのかもしれない。

日曜日、篤史とソフィアは学校から少し離れたところで落ち合って宮殿へ向かった。

紫政帝は明るいテラス席で二人を出迎えてくれた。

「や、今日は新郎新婦お揃いでお出ましかな。」

老帝はニヤッと笑った。実際、自分より若い男女二人が、お揃いの警察官姿で登場してくる様は、彼にとって初々しい以外の何者でもなかった。

「陛下、そんなお戯れを。恐れ多いことにございます。」

篤史はたじろぎ、ソフィアは顔を赤らめた。

「そうかな。君たち二人はどこからどう見ても……。まあよい。さて、それではゆるりと警察学校の近況を聞かせてもらおうかな。皆は慣れたかね。」

「はい、訓練は順調に進んでおります。訓練生たちもだいぶ変わってきました。今は、法学と剣道の講義が終了し、科学と合気道の稽古に切り替えるところです。このままでいけば、次の資格試験には、ほぼ全員が巡査に合格するかと。」

篤史が報告する。

「そうか、順調に進んでいるのじゃな。何よりだ。それと、ソフィア、大事ないか。医師の診察は受けているそうだが。」

やはりこの方は案じて下さっていたのか、とソフィアは思った。

「どうもありがとうございます。おかげさまで無事に日々を過ごしております。紫政帝陛下には過分なご配慮をいただき、感謝申し上げます。」

それから三人は今後の講義の予定や定期的な打ち合わせの日取りなど様々ことを話し合った。

その間、篤史はちらちらとソフィアの顔を見た。紫政帝から言われるまでもなく、彼はその少し前からソフィアのことを気にかかるようになっていたのだ。

(だけど、この人は隣国のお姫様……。そんなわけにはいかないじゃないか。)

そう思っていた。

だが、いざ他の人から言われると、恋愛への憧れが脳裏をかすめる。

(彼女は美しく聡明だ。僕も妻にするなら、こんな人がいい……。)



